

学生講師によるワークショップの試み

－真の主体性を求めて－

基盤教育機構准教授 田上 正範

キーワード

能動的学習 Active Learning、ワークショップ Workshop、交渉学 Negotiation Theory

概要

本稿は、自らの取り組みが真の主体性を育む活動になっていないと省察し、新たな試みとして、学生が講師となるワークショップに取り組んだ実践報告である。教員が一言、学生に声をかけるだけで活動を完結し、学生自らの意思で展開するような実践を試行するものである。

1. 背景

文部科学省中央教育審議会の答申（2012年8月）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」¹⁾において、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない」とし、「主体的な学修を促す学士課程教育の質的転換」の必要性が言及された。一方、大学の取り組み状況として、2013年2-3月に実施された、日本高等教育開発協会とベネッセ教育総合研究所の共同調査²⁾（全国・国公立大学学科長全5,196学科配布、2,376学科の回答：回収率45.7%）によると、学生の主体的な学習を促すカリキュラムの導入は、約8割の学科が導入済みであり、具体的な教育方法として、「プレゼンテーション」「個人・グループでの調査学習」「討論・ディベート」「海外学習」「インターンシップ」等の割合の高いことが報告されている。実際、拙者自身もこれらの教育方法を取り入れた授業を積極的に実践しており、多様な場面で目にするのは少なくない。しかし、ここで疑問が生じた。本当に学生自らの意思に基づいた活動になっているのだろうか、一見すると、学生の能動的な言動に見えるが、実は作られた主体性を賞賛していないだろうか、である。

主体性は、自らの意思に基づくものである。しかし、学生自らの意思で能動的に振る舞う活動は、教職員が用意した、言わば‘かご’の中での言動であり、かごの外に出ると急に受動的な振る舞いになったりかごの外に出ることを強く拒んだりする場面に、拙者は幾度となく遭遇している。さらに付け加えると、かごの外に自らの意思で踏み込む学生と出会うが、大学教育とは全く関与しないところでその契機を得、試行の場のひとつとして、たまたま大学を使用したにすぎないのかも

しれない。もしもそうであるなら、現在取り組む主体性を育む活動は、真の主体性を育む教育環境として不十分であり、自らの活動を振り返る必要がある。

本稿は、自らが取り組む主体性を育む活動の中から、ワークショップを取り上げ、真の主体性を育む活動になっていないと省察し、新たな試みに取り組んだ実践報告である。教員が一言、学生に声をかけるだけで、活動（ワークショップ）を完結し、学生自らの意思で展開するような実践を試行するものである。

2. 実践

ワークショップを実施する上で必要な役割を挙げる。ワークショップの開催規模によって、必要な役割は異なるが、一例として表1にまとめる。また、その実績を表2に、実施の様子を図1、2、3、4に示す。全ての開催に共通することは、講師が学生であることである。

表1 ワークショップの役割 (例)

	主催者	講師
当日まで	企画立案、募集、会場手配、調整	講義設計、教材検討、教具手配
当日 (当日後)	受付、会場設営、司会 (報告書作成)	講師、資料配布 (評価)

表2 ワークショップの実績 (実施期間：2015年6-12月)

NO.	開催日 2015年	人数 [人]	主催者	講師 (学生)	主な内容	開催曜限
1	6/13	21	拙者	追大 A	しゃべり場	土曜 3-5 限
2	7/11	20	拙者	追大 A・B	しゃべり場	土曜 3-5 限
3	9/12	15	拙者	関大 a、b	交渉学	土曜 3-5 限
4	9/22	16	追大 A	関大 b	交渉学	火曜 4-5 限
5	10/21	10	追大 A	京産 i	アイスブレイク	水曜 5 限
6	10/29	18	追大 A	京産 i	ファシリテーション	木曜 4 限
7	11/16	10	追大 C	追大 D	自己理解	月曜 4 限
8	11/20	8	追大 D	追大 C	ロジカルシンキング	金曜 5 限
9	11/26	4	関大 a	関大 b	交渉学	木曜 4 限
10	12/4	16	関大 a	関大 b	交渉学	金曜 1-2 限
11	12/24	18	関大 a	関大 b	交渉学	木曜 4 限
12	12/19	32	追大 A	関大 c・追大 E	交渉学	土曜 3-5 限

〈注釈〉「追大」：追手門学院大学の学生、「関大」：関西大学の学生、「京産」：京都産業大学の学生
 「しゃべり場」：NHK 教育で 2000 年頃放送された番組から派生したもの。「10 代が 10 代に向けて問題提起し、ひとつのテーマに対して多様な感性と価値観をぶつけあうトークバトル。台本なし、司会者なし。」³⁾という番組の特徴を活かし、話し合いたいテーマに沿って、参加者同士で意見を述べ合いながら進行するもの。討論による結論やアウトプットよりも、自由な意見を出すことを目的とする。

9月
12
学生企画 交渉学ワークショップ ～困難な会話を乗り越えよう！～

公開：主催者: 浜尾 内記さん 参加する 保存する 招待

2015年9月12日
13:30 - 17:30 (UTC+09)
1日前

追手門学院 大阪梅田サテライト
〒530-0012 大阪市北区芝田一丁目1番4号 阪急ターミナルビル10階 [地図を表示](#)

招待されている人

11	6	142
参加	未定	招待済み

親と将来のこと、友人にやめてほしいことを話すときなどに、何を言っているかわからず、感情をただぶつけ、相手との信頼関係は悪化したが、何も進展はなかったということはありませんか？

今回のワークショップではこのような困難な会話を「交渉学」という学問を用い、話し合いを通じて永く続く信頼関係を築き、その関係を維持する、人と人のコミュニケーションを考えていきます。

ワークショップの内容は、ある親子の口論を元にしたケースを使い、参加者のみなさんに親と子に分かれてもらい、それぞれの役ごとにグループワークをし、最後には自身の役になりきって実際に相手側の役の人と1対1で話し合う「模擬交渉」をしてもらいます。
ただ知識を吸収するだけでなく、自身で考え動くことで学びも深くなると思います。

当日、たくさんの方にお会いできることを楽しみにしております。

日本語・プライバシー・規約・Cookie・広告・AdChoices・その他
Facebook © 2015

図1 ワークショップの開催案内（募集）の一例

引用 <https://www.facebook.com/events/156822797984873/>



主旨説明（担当：学生 A）



アイスブレイク（担当：学生 B）



ポイント解説（担当：学生 C）

図2 ワークショップの様子

主旨説明、アイスブレイク、ポイント解説などの役割を、学生が分担して実施



図3 ワークショップ実施後の報告の例
実施報告を、大学公式 facebook に投稿
引用 <https://www.facebook.com/OtemonGakuinUniversity>



図4 その他のワークショップの様子
各講師（学生）が、グループワークを中心に、様々な教材を使用して実践

本稿は、真の主体性を育む活動を目指している。本実践で、教員（拙者）が行った主な役割は、会場手配の教室予約のみである。それは、本学の運用上、教室利用には教員の承認が必要なためである。また、初期段階では、拙者が主催したが、その後は受講した学生を中心に、学生だけで展開している。いずれの開催も学生が講師を行っており、学生自らの「講師をしたい」という提案（意思）を発端にし、その提案に賛同した者が主催者となり、ワークショップを企画・実施している。その展開の流れを表3にまとめる。

表3 ワークショップ開催の特徴・展開の流れ

NO.	開催月日	人数 [人]	主催者	講師（学生）	特徴・展開の流れ
1	6/13	21	拙者	追大 A	拙者が主催し、追大 A と関大 a、b の学生に機会を提供
2	7/11	20	拙者	追大 A・B	
3	9/12	15	拙者	関大 a、b	
4	9/22	16	追大 A	関大 a	経験者の追大 A と関大 a が連携試行
5	10/21	10	追大 A	京産 i	追大 A とその知人（京産 i）で試行
6	10/29	18	追大 A	京産 i	
7	11/16	10	追大 C	追大 D	受講者が賛同し、試行
8	11/20	8	追大 D	追大 C	
9	11/26	4	関大 b	関大 a	経験者の関大 a と b が試行
10	12/4	16	関大 b	関大 a	
11	12/24	18	関大 b	関大 a	
12	12/19	32	追大 A	関大 c・追大 E	経験者と受講者が連携し、試行

〈注釈〉「追大」：追手門学院大学の学生、「関大」：関西大学の学生、「京産」：京都産業大学の学生

3. 考察

本稿は、真の主体性を育む教育環境づくりとして、ワークショップを取り上げ、学生の「講師をしたい」という自らの意思を契機に、学生だけで活動を完結する試みの実践報告である。実践の初期段階では教員の補助を必要としたが、初期以降は、受講経験者を中心に、学生自らの意思で次開催に展開し、ワークショップを企画・実施している。言わば、自ら学び合う学生集団であり、自らの経験を他者へ伝えようとする仕組みと言える。ここで、企業などの組織において、長年かけて蓄積された経験の知（以下、「経験知」と記す）を組織内に移転する研究を引用する。レナード(2005)⁴⁾は、「組織の中には、頭や手に直感や判断力や知識（目に見えるものもあれば、目に見えないものもある）を蓄えている人たち」をエキスパートと呼び、知識移転の過程の観察から、エキスパートでなくても知識のコーチになれることをまとめた（図5）。エキスパートは、初心者がもつ課題の解決策を知っている。しかし、知識のギャップがあまりに大きいため、なぜ初心者がわからないのか見当がつかない。そのため、初心者が解決策の知識を得たとしても、似たような場面に再会した場合に帰着できず、同様の課題を繰り返しやすい。一方、つい最近まで初心者だった見習いは、初心者の気持ちがよくわかるため、わからない理由や背景を見当することができる。そのため、似たような場面に再会した場合に活用しやすい状態で伝えることができるのである。

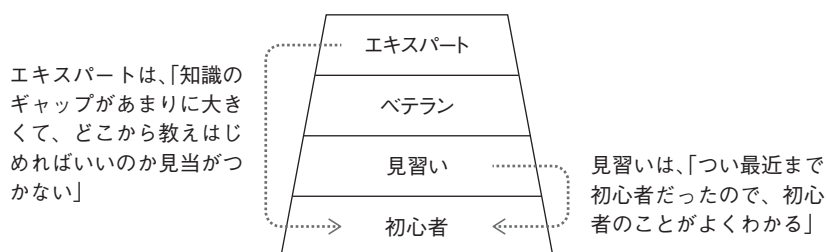


図5 経験知の伝え方の違い（引用文献4）

エキスパートは、初心者がもつ疑問や課題の解決策を知っている。しかし、知識のギャップがあまりにも大きいため、初心者がなぜわからないのかが見当がつかず、どこから、どのように教えればよいのかわからない。一方、つい最近まで初心者だった見習いは、初心者の気持ちがよくわかる。

続いて知識移転の効果が高まる方法を図6に示す。知識の移転は、教えることと学ぶことからなるプロセスである。図6の下から上に進むにつれて、学習者の主体性が増し、経験的な側面が強まる。レナード(2005)⁴⁾は、「一方通行的性格が強い方法は、双方向的なやり取りと比べて、現実の知識を移転しにくい」と考える。いきなり結論だけを聞くよりも、ある問題についてあれこれ考えて仮説を立てるといった経験が、問題と答えを脳に定着させる役に立つからである。さらに、記憶に残る深い知識をつくり出すには、直接の経験と発見にはかなわない。そのために、「指導のもとでの経験」を積み重ねることが重要である。なお、ここでいう「指導」とは、学習者の経験的な側面を

強め、より主体性を増すための必要最小限の手引き的なことを示し、決して、結果を最大化し、成果を確実にするための管理重視的なことではない。

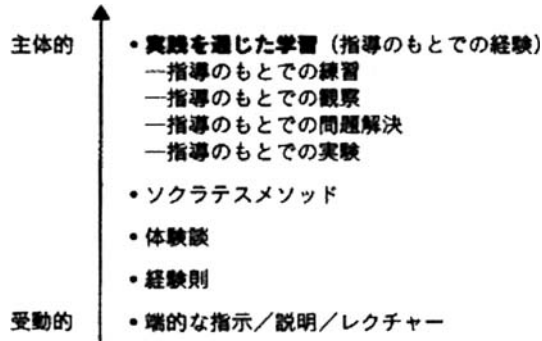


図6 知識移転の方法 (引用文献4)

指導のもとで経験を積むことは、ほかの知識移転・創造の方法より効果的な可能性がある。第一に、指導のもとでおこなう行動とコーチからのフィードバックの組み合わせは、認知心理学で言う「よく考えられた練習」にはかならない。第二に、コーチは教え子を訓練して、自然に発生する状況を観察させ、そうした状況と計画的に遭遇させることにより、知識を抽出させることができる。第三に、指導のもとでの問題解決を行わせれば、指導なしの経験を上回る成果が期待できる。第四に、実験と探索を通じて初心者が不確実性を減らす助けができる。教え子は実験により得た情報を吸収するだけでなく、仮説と検証を通じた思考能力を高めるのである。直接的な経験を積ませることで定着を図り、学習者の主体性を増すのである。

本稿は、学生が授業及び授業外の活動を通じて得た経験を、同じ仲間に伝えたいとする欲求を契機としている。教員は、異なる経験を積んだ学生に、「指導のもとでの経験」を積ませることにより、学生の経験的な側面を強め、学生の主体性を増す学生集団をつくることができると考える。経験知を伝える技術を身に付けることにより、自らの意思で、相互に学び合う活動を継続し、持続可能な学習集団へと発展することを期待する。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 26350294 の助成を受けたものです。

引用文献

- 1) 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- 2) VIEW 21 大学版 2013 Vol.1 Autumn, pp 6-11, pp 18-22.
- 3) NHK アーカイブス「真剣 10 代しゃべり場」の番組詳細を引用 http://cgi2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D 0009040356_00000
- 4) ドロシー・レナード、ウォルター・スワップ「経験知」を伝える技術—ディープスマートの本質 (Harvard business school press), ランダムハウス講談社, 2005, pp.223-230, pp.251-252, pp.265-293.